

私を墮とせるのはただ一人？ いや、こ  
こからが恋人だし！

【第3話】

みなぎし  
すい

【人物一覧表】

柊千咲（6）（現在）：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

柏木奈子：千咲の叔母

神谷里見（1 2）（現在）：女子高生

杉園愛梨（1 2）（現在）：女子高生

飯田早苗：女優

向崎珠江（1 2）：里見の幼馴染

里見の母：医師

里見の父（4 1）：会社員

院長：院長

教師

看護師 A

看護師 B

○ 柏木宅・居間

柊千咲と白石彩夏、閉まった扉を見つめる。

彩夏「ごめん、ちょっとやりす」

千咲「ばかつ！」

千咲、彩夏に平手打ちする。

千咲、目に涙を浮かべている。

千咲「見られた！ 奈子おねえさんにだけはバレたくなかったのに！」

彩夏「千咲……」

千咲「そっち系だって誤解されたから、奈子さんに合わせる顔がないじゃん！ 奈子さんだけはずっと味方でいてくれた大事な人なのに！」

彩夏「あ……てっきり、いいものかと……」

千咲「いいよなんて言った覚えはないよ！ 雰囲気だけで押し倒してきてさ！ 別に好きでもないのに！」

彩夏「っ、ごめん……」

彩夏、しゅんとしてうつむく。

千咲「大っ嫌い！」

○同・廊下

千咲、勢いよく扉を開けて走り去る。

柏木奈子、走り去る千咲の背中を見つめる。

彩夏「待って！ 千咲！」

彩夏、居間から出てくる。

奈子「待ちなさい」

奈子、彩夏の肩を掴む。

奈子「自分の気持ちだけを優先して、千咲ちゃんの気持ちを考えずに襲ったの？」

彩夏「えっと、それは……」

彩夏、うつむく。

彩夏「はい……」

奈子「そう。千咲ちゃんに嫌われているのなら、もう二度と近づかないで」

奈子、その場を去る。

○女子高・3の3教室（朝）

千咲、自分の席でゲームしている。

千咲N「結局、気まずくて奈子おねえさんと顔を合わせられなくなった」

彩夏、神谷里見、杉園愛梨、飯田早苗、

教室に入ってくる。

彩夏と千咲、目が合う。

彩夏「千咲……」

千咲「ふんっ！」

千咲、そっぽを向く。

彩夏、悲しそうにうつむく。

里見「おいおい、おまえらどうしたんだよお

おえ！」

愛梨「なにか、変……」

早苗「彩夏？」

彩夏「……ごめん」

彩夏、教室から出ていく。

○同

生徒たち、授業を受けている。

彩夏の席が空席になっている。

千咲、彩夏の席をじっと見つめる。

千咲 M 「違うもん。いいなんて言っていないもん」

チャイムが鳴る。

教師、挨拶をして教室を出る。

生徒たち、それぞれの輪を作って喋り始める。

愛梨 「ね、ねえ千咲ちゃん」

千咲 「愛梨ちゃん。何」

千咲、不機嫌そうな表情で反応する。

愛梨 「あの時、千咲ちゃんが目をキラキラさせてきてたから、わたしの家に来たいんだってわかったよ」

千咲 「あっそ」

○ 同・屋上

千咲、手すりにもたれかかって街並みを見ている。

里見 「こんなところで何やってんだよ」

里見、千咲のもとへ歩み寄る。

千咲「なに。1人にしてほしいんだけど。ほ  
つといて」

里見「あんなもん見せられてほっとけるかよ」

千咲、拳をぎゅっと握り、唇をぎゅつ  
と噛む。

里見「今日、あたしの家に来いよ。その様子  
だと、あの人も気まずくなって居場所ね  
んだろ」

千咲「……」

里見「泊まらせてやるからよ、落ち着くまで  
うち来いって」

○神谷宅・居間

里見「ゆっくりくつろいでいけ」

千咲「……」

千咲、部屋の隅に荷物を置き、椅子に  
座ってゲームを始める。

里見「ほらよ、ジュースとクッキー」

里見、机にオレンジジュースとクッキ  
ーを置き、机に座る。

2人、ジュースとクッキーを食べ始める。

千咲「優しいじゃん、里見ちゃん」

里見「友達だから。千咲は優しいから、家に呼んでもいいと思ったんだよ」

千咲「そう。で、何があったか聞きたいの？」

里見「ああ、そうだよ」

千咲「でもプライバシーだから。知られたくないから」

里見「友達だったら、困ってるときは、力になりたい、それが普通だろ？」

千咲「そうだね」

里見「……なるほどな、なんとなくわかったよ。プライバシーってそういう」

千咲「うわ、バレた。最悪」

里見「悪い。でも深くは聞かねえし、間違ってもバラしたりしねえから安心しとけ」

千咲「……わかったよ」

○同（夜）



里見の母、里見の父（41）、里見、  
千咲の4人が晩ごはんを食べている。

里見の母「もうすっかり足はいいの？」

千咲「はい、おかげさまで」

里見の父「事情があるんだろう？ それなら、  
落ち着くまでゆっくりしていつてくれ」

千咲「はい」

○同・寝室（夜）

暗い部屋。2人、大きめの同じベッド  
で仰向けになっている。

千咲「バラしてないよね」

里見「そんなことするわけねえだろ」

千咲「優しいね、彩夏と違って」

里見「彩夏がなんかバラしたのか？」

千咲「うん……いや、ちょっと違うけど、奈  
子おねえさんが帰って来てるのに気づかな  
くて。ほんと、タイミング悪い」

千咲M「あれ。なんでこんなこと話して……  
バレたらよくないかもしれないのに」

里見、LINEを開く。

○女子高・3の3教室（朝）

生徒たちが、しゃべったり勉強したり  
している。

早苗、愛梨、彩夏の3人が彩夏の席の  
近くにいる。

愛梨「里見ちゃん、休みだね、LINEで、  
出かけるから休むって、昨日突然連絡きて」

早苗「柊も休みみたいだけど。彩夏、何か知  
ってるの？」

彩夏「知らないよ……」

涙が、彩夏の頬を流れ落ちる。

彩夏、両目の下を手で押さえる。

早苗「嘘が下手すぎ。まあ詳しくは聞かない  
けど、次彩夏を泣かせたら柊のこと許さな  
いから」

彩夏「そ、それはちよつと……」

早苗「はあ。ほんつと、彩夏ってばお人好し」

○ファミレス

昼の日差しが店に差し込む。

たくさんのお客様がいる。

千咲と里見、横並びに座っている。目の前に料理が置かれている。

里見「グループLINEに連絡しといたから。

今日は休め」

千咲「もう昼だけど……っていうか、そんなことしてたんだ」

里見「見てねえのかよおおえ！ ……ああいや、見たくないなら仕方ねえな」

千咲「……」

里見「で、千咲はなんて言ってそんな状況になったんだよ。そこがわかんねえと、お前が悪いのか彩夏が悪いのかわかんねえぞ。バラさねえから話してみろって」

千咲「はぁ」

千咲、ため息をつく。

千咲「わたしは、友達だって何回も主張してた。けど……これ以上言わせないで。恥

ずかしいし、彩夏に悪いから」

里見「千咲、やっぱ優しいじゃねえかあおえ  
！　なんでそんな怒ってまで彩夏気遣うん  
だよおおえ！」

千咲「だって、里見ちゃんと彩夏は友達じゃ  
ん。里見ちゃんの大事な友達にひどすぎる  
ことできない。まあ、大嫌いつてひどいこ  
とやってきたんだけどね……」

里見「まあ、千咲と彩夏と早苗はあたしの大  
事な友達だ」

千咲M「……やっぱ、愛梨ちゃんと何かあつ  
たんだ」

千咲、そわそわする。

里見「そんな気になるなら教えてやるよ。ま  
だ誰にも教えてねえことをな」

○（回想）森の中

快晴の天気。

里見N「あたしと愛梨、そこで、幼馴染のた  
まちゃんってやつがいたんだ。あたしは、

たまちゃんが大好きだった」

大きな木がたくさん生えている森の中。

張ってあるヒモにつかまって道をのぼ

っている愛梨（12）、里見（12）、

向崎珠江（12）。

里見N「愛梨は、森の中に張ってあったヒモ

を面白半分で揺らした。面白半分……だっ

たと思う」

愛梨、ヒモを揺らす。

珠江、手を滑らせて落ちる。

## ○山・麓

救急車に運ばれていく珠江。

里見、泣きながら走り去る救急車を見

る。

（回想終わり）

## ○ファミレス

里見「斜面を転げ落ちたたまちゃんは病院に

運ばれたけど、結局死んだんだ。愛梨は、

あの場合から逃げた。そんなやつと、友達なわけねえだろ」

千咲「それは、謝られたの？」

里見「ああ、何回もな！ 必死に謝ってこられたよ！」

里見、叫んで机を思いっきり叩く。

里見「あ、怒鳴って悪い。でも、千咲には話したくなっただよ」

千咲「そっか、ありがと。やっぱ、友達っていいなあ……」

千咲の目からぼろぼろと涙が溢れる。

里見「何泣いてんだよ」

涙が机に落ちる。

千咲「な、なんで。大嫌いなはずなのに」

千咲、涙を腕で拭く。

千咲「こんな気持ち、嘘だ」

里見、千咲にポケットティッシュを渡す。

里見「苦しむくらいなら、自分に正直になつた方がいいぜ。ほら、心の中に思ったこと

だけをするってことだよ」

千咲「でも、大嫌いって言った」

里見「もう1回よく考えてみる。嫌いじゃないなら早めに言えよ？ お前の本心はなんて言ってるんだよ」

千咲「わかんないよ……」

里見「嫌いならなんで泣いてんだよ？」

千咲「それは……」

里見「千咲。お前はあたしの大事な友達なんだ、友達が泣くのなんて見たくねえよ。健康なのは、心の健康も含まれてんだからな？」

○（回想）病院・病室

院長（50）、千咲（6）と向かい合う。

院長「おめでとう、よくがんばったね」

千咲「ねえねえ！　なんでおいしやさんやってるの？」

院長「みんなを笑顔にするためだよ」

（回想終わり）

○ファミレス

千咲「あ……」

里見、千咲を抱き寄せる。

千咲「あ、あったかい……あ、涙が止まらな  
いよっ……」

千咲、大粒の涙をこぼす。

里見M「やれやれ。仕方ねえな」

○女子高・屋上

千咲「里見。放課後にこんなところ呼び出して  
何」

里見「いいからここにいろって」

千咲「ちよつと意味わかんない」

里見「そろそろあたしは行くからな！ 戻っ  
てくるまでここ動くんじゃねえぞおおえ！」

里見、屋上出入口の扉を開けてどこか  
に走り去る。

千咲「何を？　なんか持ってくんの？」



しばらく時間が経つ。

千咲「はあ。日が暮れそうになったら帰ろう」

階段を上がってくる足音がする。

千咲「あ、来た」

扉が開く。

千咲「え？」

彩夏が出入口から出てくる。

彩夏「あれ、里見に呼ばれて来たのに、なんで千咲が」

千咲M「里見ちゃん、まさか」

2人のあいだに流れる沈黙。

彩夏、千咲「えっと……あつ」

千咲「な、何？」

彩夏「えっと、その」

千咲「何かあるなら早く言ってよ」

彩夏、うつむく。

彩夏「わたし、千咲を好きってことばっか考

えてて、千咲の気持ちを考えてなかったの」

千咲「知ってる」

彩夏「大好きな気持ちって、押さえるのが難

し い ン だ ね …… 初 め て 知 っ た よ」

千 咲 「そ う」

彩 夏 「だ か ら、そ の …… ご め ん ね。も う 友 達  
に は 戻 れ な い ね」

千 咲、拳 を 握 っ て 歯 を 食 い し ば る。

千 咲 「ば か！」

彩 夏 「え っ」

千 咲 「わ た し だ っ て、い っ ぱ い 悩 ん だ の！

大 嫌 い な は ず な の に、ず っ と 胸 が 苦 し く て

さ ……」

彩 夏 「千 咲 ……」

千 咲 「わ た し の 気 持 ち も 考 え ず に、友 達 や め  
る な ん て 言 わ な い で よ！」

彩 夏 「え っ？」

千 咲 「っ …… あ あ も う！」

千 咲、彩 夏 の 目 の 前 ま で 歩 く。

千 咲 「は い！ 友 達！」

千 咲、む り や り 彩 夏 と 握 手 す る。

彩 夏 「い い の？ こ ん な わ た し で」

千 咲 「彩 夏 み た い に か わ い く て 優 し い 友 達 だ

から好きになったんだよ！ 友達としてね  
！」

彩夏「……ふふっ」

彩夏、笑う。千咲、笑顔になる。

○白石宅・寝室（夕方）

ベッドに転がる2人。

千咲「でも、あれはやりすぎだから禁止！  
その……あんなえっちなの、は、恥ずかし  
いから……」

千咲、頬を赤らめてもじもじする。

千咲「く、悔しかったらわたしを惚れさせて  
みてよね！ えっちなこと以外で！」

彩夏「ふふっ。そうだね」

千咲「でも……彩夏がそんなにしたいなら、  
お、おっぱいとキスくらいなら許してあげ  
る。そのくらいだったら、友達でもするか  
ら……」

彩夏「ふえっ」

彩夏、頬を赤らめる。

千咲、彩夏の唇に自分の唇を重ねる。

千咲「んっ」

彩夏M「千咲からこんなこと……あ、好き、好きっ」

2人、舌を絡めあう。

彩夏、千咲の胸を揉みしだく。

千咲「んっ！」

彩夏M「やば、えっちすぎる」

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

彩夏、千咲の胸の突起をつまむ。

千咲「んっ！ んっ！」

腰をビクビク震わせる千咲。

互いの唇が離れる。

千咲「や、やっぱ恥ずかしいっ……こ、こんな

のほぼやっちゃってるよ……」

彩夏「やっぱ、なしにする？」

千咲「でも、友達だし……」

彩夏「好き」

再び、2人が口づけする。

しばらく胸を揉まれ、キスをされ、喘

ぐ千咲。

○ 柏木宅・玄関（夕方）

千咲「ただいま……」

奈子「おかえり」

千咲「心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」

千咲、自分の唇に手を触れる。

○ 女子高・3の3教室（朝）

千咲、自分の席に座っている。机には教科書とノートが広げられている。

千咲N「あれから一部を隠して事情を説明し、

奈子おねえさんも彩夏を許してくれた」

千咲、唇に手を添えている。

千咲の頬が赤くなる。

千咲M「彩夏、すごかった……いやいや、何考えてんの？友達、友達だから……」

彩夏「千咲！」

彩夏、早苗、里見、愛梨が教室に入っ

てくる。

千咲「おはよ、彩夏！　それと。里見ちゃん、ありがとう」

千咲、里見に向かってにこつと笑う。

里見、頬を赤らめる。

里見「お、おう……お前は友達だからよ」

千咲「里見ちゃんお医者さんになるんでしょ？　応援したい。わたしのぶんまでがんばって！　優しいし、きつとなれるよ！」

千咲、依然にこにした表情を里見に向けている。

愛梨、悲しそうに千咲を見つめる。

里見M「な、なんだ……これ」

里見、自分の胸を見つめる。

#### ○病院・資料室（朝）

看護師たち、資料を見たりしている。

看護師A「ねえ。最近、17年前の三つ子の1人が病院に来ただけど」

看護師B「三つ子？　そういうばそんな話あ

ったつけ」

看護師 A 「これ」

看護師 A が見せた資料 3 つのすべてに、  
柏木の苗字が書かれている。